

外国人に関する 震災記録集

2011.3.11

東日本大震災

日本人と外国人が互いの違いを認め合いながら、
ともに地域の構成員として暮らす社会を目指して



震災時の状況を伝え
一人一人が
行動に移すために

仙台市



外国人に関する震災記録集

発行日 2014年3月31日
発行 仙台市市民局交流政策課
〒980-8671 仙台市青葉区国分町 3-7-1
TEL 022-214-1252
編集・印刷 株式会社 ソノベ
〒980-0811 仙台市青葉区一番町 3-3-19

製作にあたり、公益財団法人宮城県国際化協会、JICA 東北などをはじめとする団体や
震災を経験した様々な国・地域の方にインタビューをさせていただきました。



いま、共生社会を目指して

多文化共生社会にふさわしい
災害時の共生のあり方を見つめます。

立場の違い、国籍の違いに関係なく、私たちの暮らしに襲いかかってくる自然災害。東日本大震災で、私たちが身を持って学んだことは、自然災害の前では、私たちの存在が「等しく小さい」ということであり、力を合わせて「お互いの生命と生活」を守らなければいけないということであり、小さな力も合わせれば「大きな防災・減災の力」になるということでした。

現在、仙台市内には約1万人の外国人が暮らしています。仙台市では、公益財団法人仙台国際交流協会(SIRA)とともに外国人が暮らしやすい社会を形成するための事業を実施しています。日本語講座や日本語教育ボランティアの育成、多言語での情報発信などによる外国人へのコミュニケーション支援の強化、地域社会における意識啓発、関係機関との連携強化、外国人の子どもの教育環境の充実など、様々な視点から取り組みを行っています。

今回発行します「外国人に関する震災記録集」は、震災時にどんなことが問題となり、どんな解決があり得たかを掘り起こし、情報を共有することを目指しています。

そして、単なる過去の記録ではなく、多文化共生において災害時の共生のあり方を未来につなげていくための「これからの教科書づくり」の一助となればと考えています。



姉妹都市・リバサイド市(アメリカ)の学生による支援活動

contents

- 特集「これからの多文化防災を考える」…………… 3P
- 検証1・その時私たちは…………… 5P
- 検証2・各団体の動きはどうだったか?…………… 10P
- レポート1・外国人の状況と仙台市・SIRAの取り組み …… 15P
- レポート2・東日本大震災における外国人被災者アンケート …… 17P



協定締結都市・台南市(台湾)からの応援メッセージ



ブリスベン市(オーストラリア)からの応援メッセージ



フランスからの支援物資

同じ地域の構成員として共生のあり方を

**「外国人でひとくりにしない。
差異を認めた上で、決して見捨てない支援を」**

宮城学院女子大学教授
J.F. モリス氏 (オーストラリア出身)

外国人と一口に言っても、経験するものが違えば、必要となるニーズ、情報が異なります。外国人を語る時、外国人を1つの集団とせずそのなかの多様性に目を向ける必要があります。外国人らしさをきわだたせるものであればあるほど、地域とのつながりを遮断する可能性があります。

震災の時に会った外国人の中には日本語が不十分な人もいましたが、それでも避難することはできていました。いざとなれば、状況を見てノンバーバルコミュニケーション等により危険を知らせて逃げるすることができます。命の危険にさらされた状況下では、「命を助ける」というルールが一つあるだけです。被災者に最初に送らなければならないメッセージは「あなたは見捨てられていない」ということです。

避難所に来た外国人への対応に追われ、高齢者の支援が十分にできなかったという問題がありますが、日本社会は超高齢化が進行しているのですから、若い外国人をお客様扱いしないで、支援などの戦力としてうまく使っていく必要もあります。

**「有事の時にも発揮できる
『セーフティネット』と『ヨコにつながり』を」**

東北大学東北アジア研究センター・専門研究員、外国人被災者支援センター・運営委員(前)、
仙台白百合女子大学/東北文化学園大学/尚綱学院大学・非常勤講師
李善姫氏(韓国)

今までコミュニティの必要性を感じていなかった外国人も、震災を通して「重要なことだ」と考えが変わって「外国人同士のネットワーク」ができました。単なる口コミ情報ではなく、「ここに聞けば正しい情報が得られる」というネットワークが必要だと私自身も感じました。他者と関わりを持つことで、有事の時にも発揮できる「セーフティネット」が広がるはず。日本社会によく見られるタテワリだけでなく、「ヨコにつながる大切さ」も見直していきたいですね。

外国人の立場で震災のような有事に総合支援することは、なかなか難しいと思います。将来を見据えた中で何かできないかと考え、子供たちへの継承語教室を始めました。目指すのは「自ら動ける人材の養成」。今後も、移住者の自助・共助組織との連携を図りながら、仙台の多文化共生の街づくりに協力していきたいと思っています。



**「お互いの立場を尊重した分かち合い。
仙台では可能だと思う」**

元寺小路教会 司祭
ボルデュック・シャール・エメ氏 (カナダ)

「困ったこと」というのは、外国人も日本人も一緒ではないでしょうか。お互いの立場を尊重した上での分かち合いが必要です。仙台市内の場合はそういった「分かち合い」が可能だと思っています。

これからの準備として、地震経験の少ない外国人に今回の経験を踏まえ心構えを伝えることは大切だと思います。防災訓練の必要性を強く感じました。

日本に住む上で心がけることは、日本の習慣を覚えて従うこと。「大声を出さない」などといった日本の生活習慣を覚えることですね。受身ではなく、日本の文化を学ぶ姿勢が必要であると痛感しました。





「これからの多文化防災を考える」

外国人に関する震災記録集を制作するにあたり、実際に震災を経験した留学生や社会人、主婦など様々な立場の外国の方に集まっていただき、多様な文化的背景を持つ人が、互いの違いを認め合いながらともに地域の構成員として防災に関する取り組みを行う「多文化防災」について考えるとともに、具体的な実現方法に向けてのアイデアを出してもらいました。その様子をご紹介します、これからの地域における共生や防災のあり方を考えます。

日時 2014年2月4日
午後4時00分～6時00分

場所 旅カフェ サマルカンド

「多文化防災の展望を皆で考えていく必要性があるのでは？」

外国人も支援の担い手として参加してもらう仕組みづくりが課題

まず最初のグループワークでは、「多文化防災」とは何か？どうあるべきか？というテーマで話し合いをしました。

出てきた言葉は「初めて聞く言葉」「多文化は国・地域によってイメージが違う」「イメージがそれぞれ異なるのでイメージを一つにすべきである」といったものでした。



日本で多文化という思い浮かぶのは外国人やその文化です。海外の人にとってどのような印象なのでしょう？

その他の意見としては「外国人の中に

もいろいろな立場の人がいる」「留学生もいれば、仕事に従事している人もいる。家族もいる」「仙台市街地に住む人もいれば、沿岸部にいる人もいる」「観光客・ビジネス人もそう」というものでした。

多文化を考える場合、外国人向けということでひとくくりせずに、むしろその立場の違いをしっかりと皆で認識し、理解し、共有することが大切なのかもしれません。

「町内会 CHONAI-KAI」を知らない？

日本に長く住んでいる人から「町内会」の話がたくさん出ました。（「町内会の情報は重要！」「機能している町内会と機能していない町内会がある」「町内会での防災訓練は日本語なので難しいかも」など）

しかし、日本に来たばかりの外国人の中には「町内会」を知らない人が多いようでした。さらに、その「町内会」が有事での「防災」や「避難」を担うということを知っている人も少ないようでした。地域コミュニティにおいて大きな役割を

果たしている「町内会」についてもっと理解を深めてもらうことが必要かもしれません。

外国人が地域社会に参画する必要性あり！

震災時などの有事には、ライフラインが途絶え、インターネット・携帯などの情報ネットワークも途絶える可能性があります。したがって地域コミュニティに関わりがないと生活に支障を来すことになりかねません。そこで多くの人たちから意見が出たのは「外国人が地域社会に参画する必要性がある」という観点でした。



「平時から外国人も参加できる防災訓練の実現へ」

今、地域の町内会が高齢化が進み、担い手不足が問題となっています。若い留学生が地域の町内会に参画すれば活性化にもつながるのではないのでしょうか。

どのような形で外国の方がローカルなコミュニティを知り、親しくなり、参画できるようになるか？ここがこれからの多文化防災を考え進める上でのポイントになると思われます。



ポイントは避難訓練の参加者を増やすこと

最後に地道ではありますが、実際に防災活動や意識向上に役立った「避難訓練」への参加を増やすにはというテーマについて議論しました。たくさんのアイデアが出たので以下にユニークなものを掲載します。

- 簡易トイレの設置を実際に行ってみる等、災害時にすぐに役立つことを訓練で実演する。
- 学生・外国人も町内会との「つながり」を創る。
- 芋煮会等のイベントと訓練を組み合わせる。
- パンフレットや回覧板で訓練について知らせるよりも、直接声がけをする方が人は集まると思う。
- 回覧板は分かりやすい日本語にしてほしい。



- または重要な部分を英語にしてほしい。
- 総選挙風に国別(国ごと)炊き出し大会を行う。
- 訓練のときに寸劇をしてみる。
- 仙台国際交流協会(SIRA)のDVD(P16参照)を見ている。You Tubeで見られる。
- 日本に入国した時に災害についての案内や情報(数種類の言語に翻訳)を渡す。
- 訓練に参加しなかったら罰金5万円を科す。参加しないのは意識が低すぎると思う。

まとめ・提言

外国人と聞くと、海外から観光や留学、ビジネスを目的としてやって来るなど、グローバルなイメージがあるかもしれませんが、一方、有事の防災や避難を担う町内会や地域の避難所で行われる防災訓練

はローカルなものに感じます。

グローバルなものとの間にギャップを超えて多文化防災を進めていくためには、外国人が地域の構成員であるという意識を日本人・外国人

双方が持つこと、また、地域の防災訓練に外国の要素を取り入れるなどの試みが、ヒントになるかもしれません。



1 外国人市民インタビュー 検証 その時私たちは…

東日本大震災時の外国人の行動や思いをたどります。

CASE 1 テーマ：文化の違いを超えて



「初めて経験した地震にパニック。 生活習慣やルールの違いで戸惑うことも」

東北大学大学院文学研究科 博士課程前期2年 アサノワ・グリザル氏 (キルギス)
学都仙台に暮らす留学生



経験のない地震にパニック。 子どもたちは食べ物がないと泣いていた

地震が起きた時、同じキルギス人の夫と一緒に交流会館*の部屋にいました。夫はトルコ地震の経験があったので落ち着いていましたが、私はパニックになり「死んでしまうかも」と思い少し泣いてしまいました。

電気も止まり不安だったので人が多いところに行こうということになり、避難所である三条中に行きました。夫は日本料理を食べることができず苦労しました。一緒にいたウズベキスタンやトルコの友人の子どもたちも、「食べられる物がない」と言って泣いていました。そこで、会館で壊れた家具等で焚き火をして、友人たちで食材を持ち寄り、肉のスープやパンを作って食べました。遊牧民の血が発揮されたと思います。

地震経験の少ない外国人は パニックになっても仕方がないのでは

避難所のトイレは便器以外のところにも汚物が散乱している等ひどい状態でした。夫は毎晩プールにあった水を使って一晩トイレ掃除をしました。震災の翌日、夫は力仕事をやりたいと避難所のスタッフに申し出たのですが、人手は足りていると断られてしまいました。明らかに人手は足りていないように見受けられたのですが…。何もしないで食べるだけしかできないことに罪悪感を覚えました。

避難所の中で「神様助けてください」と大声でお祈りして、日本人にうさがられている外国人もいました。海外からいろいろ

ろな情報が入ってきて恐怖もありましたし、災害が少ない国から来ている人がパニックになっても仕方がない面もあったと思います。外国人の気持ちを分かかってほしいという思いもありました。

地震後に日本人と外国人の壁を 薄くする活動を始めた

震災後、パスポートが一番大事なので、すぐに取り出せるところにしています。普段から日本食が食べられない夫のため、肉2、3キロと小麦粉20キロは常備しています。

避難所での経験から日本人との壁を薄くすることが必要だと考え、SIRAのせんだい留学生交流委員になりました。特に力を入

れたのは防災訓練で、三条町や片平に出かけて通訳したり、計画に関わったりしました。訓練の中で一緒にゲームをする場合、日本人の方で外国人が入っていけないような雰囲気を作ってしまうことがあります。一緒に住んでいる人として認めてくれれば、外国人も日本人に従っていけると思います。

私が地震後に日本人と外国人の壁を薄くする活動を始めたのは日本語教育学研究科の教育のおかげだと思います。研究室では先生方から、何が問題なのかを明らかにして、その解決方法を探し、実践するよう教えられました。いま、研究室での教えを実践しているのだと実感しています。

*東北大学国際交流会館。三条町にある留学生等対象の居住施設。

「日本で学んだことを インドネシアや海外で伝えていきたい」

東北大学大学院文学研究科 博士課程後期3年
エミインダー氏 (インドネシア)



周囲との人間関係を築くため、インドネシア文化を紹介する活動をしています。しかし、お祭り等には外国のことに興味がある人しか参加しないので、外国に興味のない人たちとの関係を築くことができないと感じています。

周囲にどういう人が住んでいるかが分かっていると、非常時にはいろいろな面

で協力できるかもしれませんが、個人情報保護の問題もあるのでバランスが難しいと思います。

インドネシアでは防災教育が不十分なので、日本で学んだことをインドネシアや海外で伝えていきたいと思っています。その意味でもしっかり日本で防災のことを学びたいと強く感じました。

CASE 2 テーマ：経営者の特性を活かす



「自分の特性を活かし、必要な場所にできる限りの支援を行った」

飲食店 ミドル ミックス経営 ロイ・ソメフ氏 (イスラエル)
仙台にて活躍する外国人経営者



仙台が自分の家。 お母さんの方がパニックになっていた

地震が起きたときは自宅である五十人町のマンションに一人でした。家の中はグチャグチャになりましたが、自分のお店が人生で一番大切なものだったので、バイクで店に向かいました。幸いにも壊れたものはほとんどなく、電気もつくし、ガスもすぐ復旧するだろうと思い営業するつもりでした。3月11日は予約でいっぱいでしたが、お客さんが来ないので夜8時半くらいに真っ暗な自宅に帰りました。

イスラエルの母から電話が来て、日本で地震や津波を知ってパニックになっていました。当時、仙台にはイスラエル人が一人しかいなかったため、イスラエルの報道機関等から取材の電話が入ったりしました。大使館からは帰国するよう頻りに電話がきましたが、従業員も家族もいる仙

台が「自分の家」だと考えていましたし、逃げるべきではないと伝え納得してもらいました。

経営者のセンスで 皆がハッピーになれる仕組みを考えた

アメリカのユダヤの人たちから何かを支援したいと電話がありました。パンが買えない状況、ユダヤの人からの寄付、知り合いのケーキ屋が営業できず従業員に給料を払えない状況…。この3つを組み合わせようという方法を考えていました。そして、ケーキ屋の工場で作って、そのパンの代金をユダヤからの寄付金で払い、できたパンをトラックの運転者に避難場所まで運んでもらうという仕組みを考えました。そうすれば、皆がハッピーになれる。ケーキ屋のトラックを借りて大阪まで2トンの小麦粉を買いに行きました。仙台に戻ってからは毎日5千個のパンを焼いて28日間配りました。

イスラエルの大使館や医療チームが被災地に入るときに、ユダヤ人でも食べられるパン*の材料等を手配するお手伝いもしました。ユダヤ人でも食べられるパンがないと困るということを知っていたからです。また、被災地での活動を断られて帰国しようとしていたイスラエルのボランティア団体を、ボランティアが必要な他の地区につなぐ、活動の橋渡しができました。

イスラエル人特有のサバイバル能力で できる範囲の支援

イスラエル人はプランニングなしで砂漠でもサバイバルできるような特性があるのに対し、日本人は新しいものを作り出すのは得意ではないですが、よりすばらしいものにグレードアップしたりプランニングしたりするのは得意です。それぞれの特性を組み合わせたら、よりよいものができるのではないのでしょうか。

自分は経営者として生き残る意識が強いです。自分ができることしかやるべきではないし、得意なことをできる範囲でやればよいと思っています。賃金が払えず困っている知り合いのケーキ屋さん、そのスタッフ、またトラックの運転手に寄付金がいきわたる仕組みを考え、管理することで、パンを被災地に配り、皆がハッピーになりました。自分の特性を活かし、必要な場所にできる範囲で支援できたと考えています。



被災地で配布したパン
*パンは発酵させて作ることが多いですが、ユダヤ教では無発酵パンを食べることがあります。



「自分が強くなるのが復興につながるのでは」

(株)グッドツリー 代表取締役社長 西原 翼氏 (中国名：斯 李翼)

会社を立ち上げて、何をすべきか考えていたところで震災にあいました。会社はしばらく休むしかなく、そんな時に「ITで日本を元気に！プロジェクト」を発足させた佐々木社長に声をかけられ、ITで被災地を支援できるのではないかと話になりました。東京のIT仲間とツアーを企画し、現地で1泊し、仙台で報告もかねてイベントを行うという

ことを何回も重ねました。メディアの方にも同行してもらうことで、被災地の情報を配信することもできました。震災後、介護施設をまわって必要なものを聞いてみると、介護ソフトが使えない、値段も高いという話がありました。聞いた話を元に、自社製品の介護ソフト「ケア樹」の開発を始めました。支援してもらおうのが当然だと思うと

ビジネスが弱くなってしまいます。まずは自分のビジネスを強くすることが何より大事です。真の復興は自立的な経済復興です。だから「自分が強くなるのが復興につながる」と信じています。私は独立することで人的なネットワークがより一層強くなりました。震災を通して「金儲けより人儲け」を改めて実感しました。